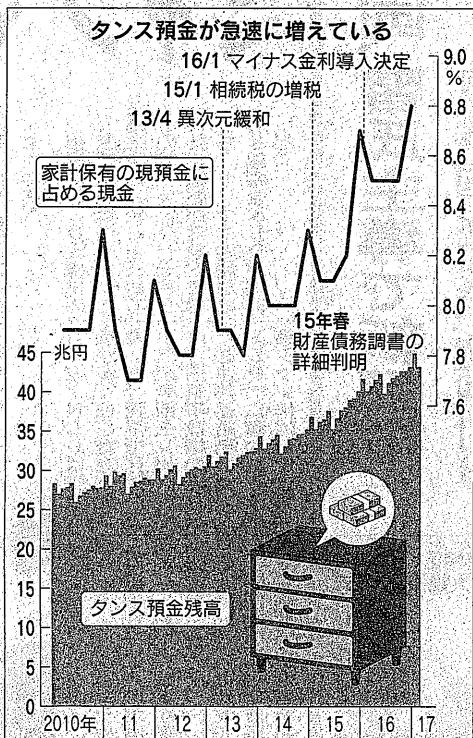


3年で3割増、43兆円



タンス預金が止まらない

エコフォーカス

タンス預金の増加が止まらない。第一生命経済研究所によると、直近の2月末時点で43兆円と前年同月比8%増えた。増加額は3兆円で国内総生産(GDP)の0.6%に達する。日銀はマイナス金利政策による預金金利の低下が一因と分析するが、金利はずでにないようなもの。現場を探ると、金利では説明できない問題が見えてきた。(高見浩輔、川瀬智浄)

紙幣の発行残高は2月に達する。日銀の2016年末時点で99兆円。このうち決済などに使われる分を差し引いてタンス預金の残高を試算した。増加率は3年間で3割強とみられる。

金利と云うが…

日銀は「家計の現金保有は預金金利と相関関係にある」と分析する。ただメガバンクの定期預金の金利は年0.01%、100万円預けた場合の金利は、マイナス金利導入の前後で、年3000円から年1000円になった程度。急に動くとは考えにくい。

現金の保管コストは決して安くはない。記者が実際に現金を詰めてみたところ、売れ筋の金庫を再現した60歳のケースに最大で約4億円入ることが分かった。金庫の実勢価格は約20万円。自宅のセキュリティにかかると、さらに膨らむ。

富裕層、現金志向強める



現金の保管コストは決して安くはない

未曾有の低金利という環境があるとはいえ、タンス預金を増やしているのは一体誰なのか。

「実は現金を自宅に置き始めているんですよね」。都内の税理士事務所では昨夏以降、こう打ち明ける顧客が相次ぎ3人現れた。いずれも会社経営の富裕層。10億円の相続を受けた都内に住む50代男性は、現金収入があった時には、一部をそのまま自宅に保管するにとっているという。

当局による包囲網だ。大増につながっている「大きなきつかけが、昨年から手メーカートの日本アイエスの「財産債務調書」のエス・ケイ」提出の義務付けだ。15年1月の相続増税を踏まえ、16年の確定申告から3億円以上の財産を持つ人などは、資産の内訳を鮮明に。インドは16年11月、高紙幣の流通を止め、欧州でも5000円紙幣が廃止になる。

調書は相続税をかける際の参考資料となる「脱税の意図までもなくとも富裕層は当局に監察されることを嫌がる」。税理士、席エコノミストは「富裕層の動きをどう見られるか、増える一因と指摘」。将来の増税や思わぬ監視強化など、警戒心の根っこにあるのは日本の財政への不安だ」と解説する。

奥底に財政不安「1億〜2億円の金額が入る金庫の大きさはどこぞが解消されない限り、金庫メーカ、対策を講じて海外カーにこんな問い合わせも増えている。「マイナンバー制度の開始も、資産を把握されることへの抱える根深い問題はすべ警戒感から、金庫の需要には解決しにくい」。

電子版 現金3億円を詰めてみた
▼Web刊紙面連動